

## カリフォルニア州の学級規模縮小クラスの実態

—2010年の授業観察と学級担任へのインタビュー調査を中心として—

星 野 真 澄

### はじめに

2010年、日本では、義務教育標準法で定める学級編制の標準を引き下げて学級規模縮小を実現しようと文部科学省が動き始めた<sup>1</sup>。文部科学省が示した公立義務教育諸学校教職員定数改善計画によれば、2011年度より8年計画で小学校と中学校の学級編制の標準を現行の40人から、35人あるいは30人へと段階的に引き下げることを目指している<sup>2</sup>。2011年度の予算案をめぐる文部科学大臣、財務大臣、国家戦略担当大臣の間で折衝した結果、2011年度予算政府案においては、小学校1年生の35人以下学級を実現するための予算を計上することになった<sup>3</sup>。この予算案および予算関連法案である義務教育標準法の改正が国会の審議で認められた場合、2011年度における小学校1年生の学級編制の標準が引き下げられることになる。このように今日の日本では、学級編制の標準を引き下げて全国的に少人数学級を実現しようと第一歩を踏み出した段階である。

一方、カリフォルニア州では、1クラスあたりの児童数の上限を20人とする学級規模縮小プログラムを長期にわたって継続的に実施している。カリフォルニア州は、1996年7月に就学前教育から第3学年までを対象とした学級規模縮小法（Class Size Reduction Act of 1996）を制定した<sup>4</sup>。法律制定以前は、カリフォルニア州の第1学年から第3学年における児童の1クラスあたりの上限人数は32人であった。1996年に学級規模縮小法が成立したことによって、それまで上限32人であったクラスサイズを上限20人へと縮小することができたのである。1クラスの上限人数を32人から20人へと学級規模を縮小させたカリフォルニア州の取り組みは、日本の事例から見れば大胆な学級規模縮小の取り組みである。初年度である1996-97年度には、学級規模縮小プログラムに参加する資格を有する895学区のうち、853学区（95%）が学級規模縮小プログラムに参加することを選択し、同プログラムの実施は急速に広まった。14年前に法律が制定されて以降、毎年、カリフォルニア州は多額の予算（2009-10年度は約18億ドル）を計上して学級規模縮小プログラムを継続的に実施している。

本稿では、学級規模縮小を先駆的かつ継続的に実施してきているカリフォルニア州を取り上げ、2010年現在、学校現場において学級規模縮小の取り組みをどのように活かし、学級規模縮小プログラムの実施を教員がどのように受け入れているのか、その実態を報告する。今回の報告は、2010年に実施した渡米調査（2010年4月27日～5月6日、2010年11月30日～12月10日）の中から、学校訪問で得た情報を取り上げることとする。カリフォルニア州の学級規模縮小法は、学級規模縮小プログラムに参加するための要件として、学級規模縮小の効果を最大限に活かす方策である教員の職能開発の提供を学区に求める特色を有している。このような法律の下、学校現場は学級規模縮小の取り組みをどのように活かして実践しているのか、その実態を明らかにするために学校現場を訪問し調査を

実施した。

## 1. 調査の概要

学校訪問では、第1学年の学級規模縮小クラスを中心に授業を観察し、その後、第1学年の学級担任へのインタビュー調査を実施した。第1学年に焦点をあてた理由は2つある。1つは、カリフォルニア州において学級規模を縮小する際、第1学年を優先して縮小することが法律で定められているからである<sup>5</sup>。もう1つは、今日の日本において小学校1年生の学級編制の標準を引き下げることが検討されていることをふまえれば、日本の小学校1年生とほぼ同年齢にあたるカリフォルニア州の第1学年に焦点をあてることで、学年に相応しい授業づくりから示唆を得られると考えたからである。

授業観察では、「1クラス20人程度の学級規模をどのように活かしているのか」ということを問題意識として持ちながら、教員と児童の関係性に注目した。また教員へのインタビュー調査では、「現状の学級規模について学級担任はどのように感じているか」ということを中心に質問した。

調査の対象校は、学級規模縮小プログラムに参加している公立学校の中から選定した。訪問した学校は、ロングビーチ学校区にあるジャッキーロビンソンアカデミー<sup>6</sup>、グレンデール統一学校区にあるバデューゴウッドランズ小学校<sup>7</sup>、サンフランシスコ統一学校区にあるシャーマン小学校<sup>8</sup>の3校である。カリフォルニア州では、ほぼ100%の学区が就学前教育から第3学年までを対象とした学級規模縮小資金を受け取って学級規模縮小プログラムを実施している。それゆえ、今回報告する3校は、カリフォルニア州において特別な事例として位置づくものではなく、一般的な公立学校の実態である。

表. 学校訪問調査の概要

学校名	ジャッキーロビンソン アカデミー	バデューゴウッドランズ 小学校	シャーマン小学校
学校区	ロングビーチ学校区	グレンデール統一学校区	サンフランシスコ 統一学校区
訪問日	2010年5月4日	2010年12月7日	2010年12月3日
調査方法	授業観察 インタビュー調査	授業観察 インタビュー調査	授業見学 <sup>9</sup> インタビュー調査
対象学年	第1学年	第1学年	第1学年 第5学年、就学前教育
観察した 授業科目 <sup>10</sup>	社会科、リーディング、 理科	リーディング、ライティン グ、日本語、算数、コンピ ューター	リーディング、ライティン グ、コンピューター、音楽
インタビュー 対象者	第1学年の学級担任1名	第1学年の学級担任2名、 就学前教育の担任1名	第1学年の学級担任1名

以下、訪問した3校における授業観察と教員へのインタビュー調査で得た内容を報告していく。

## 2. 授業観察と教員へのインタビュー調査

### ①ジャッキーロビンソンアカデミー (Jackie Robinson Academy)

2010年5月にカリフォルニア州ロングビーチ学区にある公立学校ジャッキーロビンソンアカデミーを訪問した。ジャッキーロビンソンアカデミーは、就学前教育から第8学年までの児童生徒が在籍している学校である。この学校訪問では、カリフォルニア州の就学前教育から第3学年を対象とした学級規模縮小プログラムに該当している第1学年の授業（社会科、リーディング、理科）を見学し、その後に第1学年の学級担任へのインタビューを実施した<sup>11</sup>。ジャッキーロビンソンアカデミーの第1学年の1クラスあたりの児童数は20人であるが、見学したクラスは1人転校したため1クラスの児童数は19人であった。

社会科の時間は、状況に応じて相手の気持ちを考えるシチュエーションゲームを取り入れながら、状況に応じた問題解決方法を児童一人ひとりに考えさせる授業であった。児童自身が「自分だったらどのように考えるか」、「クラスメートだったらどのように考えるか」、自由に考え、想像させ、発言させる授業形態をとっていた。児童はカーペットに直接腰を下ろし、小さな椅子に腰をかけた先生の周りに集まり、リラックスした雰囲気の中で発言をしていた。児童は非常に積極的であり、たびたび手を挙げて発言する機会を求めている。授業が始まって約30分の間にほぼ全員の児童が発言をしており、中には2度、3度発言をする児童もいた。まさに全員参加の授業実践であった。

リーディングの時間は、著者が異なる2冊の「うさぎとかめ」のイソップ物語を教材として取り上げた。教員は小さな椅子に腰をかけ児童を自分の周りに集合させ、1冊の大きな絵本を広げて読み聞かせを行った。もう1冊は、各自席に戻り、クラス全体で声をそろえて音読した。本を読み、内容を理解した後、著者が異なる2冊の物語の相違点を比較検討する授業を展開した。物語の比較検討をする際には、教員が児童から発言を多数求め、児童たちの発言を教室全体で共有し、議論できるよう導いていた。リーディングの時間の最後には、まとめのワークシートを各自行い、授業内容を振り返った。授業形態は短時間で変わったが、20人の児童たちは素早く変化に対応し、移動をスムーズに行っていた。

理科の時間は、「科学者たちはどう考えたか？」というテーマを掲げ、科学者になりきって実験を行う授業内容であった。本単元のねらいは、独楽（コマ）を教材として用いながら、①観察し、②問いを立て、③仮説をつくり、④実験し、⑤データを記録し、⑥結論を出す、という科学者たちの行う手順を実体験させることであるという。独楽の観察時間や、独楽を回す体験活動の際には、4人で1グループの班をつくり、机を向かい合わせにしながらかグループ活動を行っていた。本時は、①独楽を観察し、②研究テーマ（問い）を立てるところまでで終了したが、次回の授業以降、立てた問いの結果を予測した後、実験が続くことになる。

以上の教科は、すべてこのクラスの学級担任が受け持つ授業であった。どの教科においても、授業は全体を通して、15～20分ごとに児童に動きを与える工夫をしていた。具体的には、児童を教室の床（カーペット）に座らせたり、椅子に着席させたり、ワークシートを提出しに教室前方まで来させたり、本を戻しに教室後方の棚まで歩かせるなど、児童を動かしてメリハリをつけていた。

ジャッキーロビンソンアカデミーでは、ティームティーチングよりも学級規模縮小の方が効果的であるという考えによりティームティーチングはほとんど取り入れていない。学級担任によれば、1ク

ラス 20 人の学級規模は、個々の児童一人ひとりに手助けをすることができる適正な学級規模であるという。少人数クラスは、算数の授業において自ら手を動かして考える”ハンズオン・マス” (Hands-on Math) の実施を可能にし、理科の授業においては実験の時間をより多く確保することを可能にした。学級担任によれば、少人数クラスのメリットは、生徒が自ら学べるように授業を工夫できる点であると述べていた。必ずしも教員が児童一人ひとりに手厚く指導することだけが、少人数クラスのメリットではないという。

## ②バデューゴウッドランズ小学校 (Verdugo Woodlands Elementary School)

2010 年 12 月には、グレンデール統一学校区にあるバデューゴウッドランズ小学校を訪問した。第 1 学年の授業 (リーディング、ライティング、日本語、算数、コンピューター) を見学後、第 1 学年の学級担任に対してインタビューを実施した<sup>12</sup>。

バデューゴウッドランズ小学校では、2010-11 年度より、連邦補助金を受けて新しいプログラムである日英二カ国語教育 (日英イマージョンプログラム) に取り組んでいる。2010 年秋に日本語と英語の二ヶ国語で教育を行う日英クラスの第 1 期生となる第 1 学年の新生 25 人が入学した。第 1 学年は 4 クラスで編制されているが、そのうち 1 クラスが日英イマージョンプログラムに参加している日英クラスであり、残りの 3 クラスは英語のみで授業を行う通常クラスである。日英クラスは 1 クラスあたり 25 人であったが、他の通常クラスは 20 人程度の学級規模であった。

バデューゴウッドランズ小学校は、就学前教育から第 6 学年までの公立学校である。同校ではカリフォルニア州において就学前教育から第 3 学年までの学級規模縮小法が制定された当時から、同プログラムに参加している。学級規模縮小を実施し始めた当時、全校の在籍者数を変えずに 1 クラスあたりの児童数を 20 人以下に減らしてクラス数を増やしたため教室数が大幅に不足した。そこで教室の不足を補うために中庭の空きスペースに約 10 棟の仮設教室を建築した。仮設教室はあくまでも仮の建物であり、いずれ新校舎を増設する予定であった。しかしながら予算不足のため新校舎は増設されず、現在においても仮設教室を使用して授業を行っている。



バデューゴウッドランズ小学校の仮設教室 (筆者撮影)

授業中には、学級担任のほかにティーチングアシスタントが1名配属されている。その上、ボランティアで保護者が1名程度交代で教室に来て、教員の指示に従いながら授業補助をしていた。一斉授業を行う際には、学級担任が教室前方で授業を展開し、ティーチングアシスタントや保護者は教室後方のテーブルで授業準備を進めたり、机間巡視をして個々の児童の理解度をチェックしていた。グループ別学習をする際には、1クラス20人の児童を6～7人ずつの3グループに分けて、学級担任1名、ティーチングアシスタント1名、保護者1名の計3名がそれぞれグループを受け持つ形態をとっていた。語学の授業では、このグループ別学習の時間を長めに取っていた。グループごとに違う課題に取り組みながら、各グループの指導者が手厚い指導を施していた。グループの分け方は、習熟度別のグループ編成や、子ども同士で学び合えるグループ編成など、授業内容によって変えているとのことであった。

算数の授業では、授業の始まりに小テストを実施した。このクラスでは算数の小テストを週に2回、継続的に実施している。小テストは、全員一番易しいレベル1のテストから始まり、レベル1に合格するとレベル2のテストに進めるという。不合格であった場合は、次回のテスト時間にレベル1と同じ難易度のテストを再度チャレンジすることになる。そのため児童一人ひとりの進捗状況は異なり、それぞれが違うレベルの問題を解いていた。小テストが終わると児童は、教室後方部にあるフリースペース（カーペット）に移動し、ソファに座った教員の周りに集まって一人ずつ教員から採点を受けた。採点を受け終えた児童は、自分の席に戻りワークシートの課題に取り掛かる。その間、ティーチングアシスタントは机間巡視をしながら、必要に応じて個別に対応していた。

コンピューターの時間は、コンピューター教室に移動して授業を実施した。コンピューター教室には1クラスの人数分のコンピューターが用意されており、1人1台パソコンを使用することができる。コンピューターを使用しながら、図形の学習やデザインの学習など教科横断的な授業を展開していた。

第1学年日英クラスの学級担任は、1クラス25人の児童数を少し多い人数であると感じていた。学級担任によれば、今後、もし20人の学級規模を実現させてきた学校が、30人の学級規模になったとしたら、1.5倍増の学級規模に教員は対応しきれないかもしれないとのことであった。20人程度の少人数クラスは、グループ活動を行う時にも児童一人ひとりに目を行き届かせやすい適切な規模であるという。教員たちはカリフォルニア州の財政状況が厳しい中でも、学級規模縮小プログラムが継続的に実施し続けることを願っていた。

### ③シャーман小学校 (Sherman Elementary School)

2010年12月には、サンフランシスコ統一学校区にあるシャーман小学校を訪問した。シャーман小学校では学級規模縮小の取り組みを積極的に実施していた。校内を案内してもらいながら、授業（リーディング、ライティング、コンピューター、音楽）を短時間ずつ見学した後、第1学年の教員に対してインタビューを実施した<sup>13</sup>。

シャーман小学校は、就学前教育から第5学年までの公立学校である。就学前教育から第3学年までの1クラスあたりの児童数は22人であり、第4学年と第5学年は通常1クラス32人で編制されている。ただし第4学年と第5学年のリーディングの時間は、教員を1名ずつ加配し、教員1人につき約15名の児童で少人数授業を実施している。

第4学年と第5学年のリーディングの時間に少人数授業を実施できたのは、PTAが基金募集の活動をして集めたPTA資金を用いて教員の雇用を成功させた功績による。PTA資金から16万ドルの資金を配分し、学校独自で2名の教員を雇用した。この2名の教員が第4学年と第5学年のリーディングの時間に各クラスへ配属されたのである。さらに就学前教育から第5学年までのどのクラスにおいても、必要に応じて保護者1あるいは2名が教室に入り込み、教室後方にあるテーブルで授業中に使う資料の整理など学級担任の手伝いをしていた。

教員は1クラス22人の学級規模であっても児童数が多いと感じており、1クラス32人の学級規模は大きすぎる規模であると述べていた。適正規模を教員に尋ねたところ、就学前教育から第3学年までは11人から20人までの学級規模を希望し、第4学年と第5学年は21人から25人を望んでいた。インタビューの中で教員は、本校の教員たちの大半が、ティームティーチングよりも学級規模縮小を望んでいると述べていた。学級規模縮小を実施したことによる最大のメリットは、教員がより多くの時間を個別の児童一人ひとりに費やせるようになった点であるという。シャーマン小学校では、たとえ連邦や州から学級規模縮小資金が削減されたとしても、PTA資金を用いて学級規模縮小を継続していきたいと考えているとのことであった。

### 3. 調査のまとめ 一学級規模縮小クラスにおける工夫

#### (1) 変化に富んだ授業形態

今回報告した3校の第1学年の教室では、どのクラスにおいても教室内のスペースを最大限に使って、動きのある授業を実施していた。児童が座席から立ったり座ったりする動きや、授業形態に変化をつけるという工夫が見られた。

教室には児童20人分の椅子と机が配置されているが、フリースペースも十分に確保されている。リーディング、算数、社会、理科など多くの教科で、児童が座席を離れフリースペースで授業を受ける場面も多数あった。教室内の児童の移動は少人数であるためスムーズである。フリースペースを活用した授業では、教室の床（カーペット）に児童たちが身体を寄せ合って座り、教員の話聞いていた。その際、教員は小さな椅子やソファに腰をおろして児童と視線を合わせて会話をしていた。教員と児童の距離や児童同士の距離が近いこの形態は、アットホームな雰囲気を作り出すことができるメリットを有していた。

また授業形態の変化も頻繁に見受けられた。一時間の授業の中で、一斉授業、グループ活動、個別の活動など、活動の内容によって授業形態を変えていた。一斉授業の場合であっても、机の向きは教員に向かって一定方向に列を作って並んでいるのではなく、コの字型や児童同士が対面する机の配置など様々であった。移動がスムーズにできる20人という学級規模を活かして、授業形態を変え、動きのある授業を実施していた。

#### (2) 児童の積極的な参加を促す授業

第1学年のクラスでは、どの授業においても児童が教員の話静静地に聞く時間よりも、教員が投げかけた質問に児童が考えて答える時間や児童が体験・実験する時間の方が長く取られていた。授業形態が一斉授業であっても教員による一方的な伝達はあまり見受けられない。第1学年の児童たちは落

ち着きのないようにも見えるが、受身の態勢ではない積極性が感じられる授業風景であった。

また授業形態の違いに関わらず、生徒に発言を求めることが多々あり、生徒の発言を中心に授業を展開していた。一人ひとりの考え方を問い、多くの児童に考えを発言させていた。20人クラスの場合、たとえ1人30秒であっても、10分間でクラス全員が自分の考えを発言することができる。挙手を求める場合もあったが、挙手よりも自由に発言を求めることの方が多く見られた。教員は20人程度の児童全員を見渡しながらい人ひとりの発言を汲み取り、発言を教室全体で共有できるよう導いていた。

授業に参加していることを児童が自覚できるような工夫は、発言の機会だけではなかった。リーディングの授業では音読の時間を設け、算数の授業では児童一人ひとりが自ら手を動かし考える“ハンズオン・マス”を実践し、理科の授業では児童が自ら体験できるよう実験を取り入れるなど児童に活動の機会を与える工夫をしていた。さらに、活動だけで終わらないよう、その後のディスカッション、小テスト、振り返りシートを取り入れながら授業内容の理解度を確認していた。

### (3) 20人クラスの継続的实施

今回報告した3校は、カリフォルニア州の就学前教育から第3学年までの学級規模縮小プログラムに参加している学校である。そのため該当学年の1クラスあたりの児童数は、20人程度の学級規模を実現していた。教員たちは20人以下の学級規模を高く評価しており、学級規模縮小の継続的实施を強く望んでいた。学級規模縮小の継続的实施を求めているのは、教員だけではない。学級規模縮小に関する保護者の要求の強さは、行動にも現れていた。シャーマン小学校では、PTAが集めた資金で教員を2名雇用している。たとえ州の学級規模縮小予算が減額されたとしても、PTAが力を合わせて資金を集め、教員を雇用する姿勢をとっていた。

またシャーマン小学校においてもバデューゴウッドランズ小学校においても、ボランティアで保護者が授業中、教室の中で学級担任の授業補助をしていた。1クラス20人の教室に、教員1名と保護者やティーチングアシスタントなどの授業補助者1～2名を加配して手厚い指導を施している様子は、筆者にとって非常に印象に残る授業風景であった。



ジャッキーロビンソンアカデミーの第1学年の教室（筆者撮影）

## おわりに

昨今のカリフォルニア州では、厳しい財政状況が続いており学級規模縮小プログラムの予算が削減されるのではないかと教育関係者や一般市民から不安の声が渡米調査中においても数多く聞こえてきた。財政状況が厳しい中でも学校現場においては、教員や保護者が学級規模縮小の継続的実施を強く望んでいることがインタビュー調査を通じて切実に伝わってきた。カリフォルニア州の教員たちは、20人以下の学級規模を適正規模であると捉えており、現在実現できている20人程度の学級規模縮小プログラムを今後においても継続的に実施することを望んでいた。さらに教員と保護者が協力して実施したシャーマン小学校におけるPTA資金の活用事例は、学校現場に与えられている自由裁量を活かして実施した、学級規模縮小を継続するための必死の取り組みである。

カリフォルニア州の20人クラスの授業実践では、教員が児童一人ひとりに向き合いながら、児童とのコミュニケーションを充実させていた。学級規模縮小を実施したことによって、学級担任や授業補助者が、児童一人ひとりに向き合う時間を十分に確保できることは望ましいことである。ただし、教員が児童に個別の時間を費やすことだけが少人数学級のメリットではないことを授業観察・インタビュー調査を実施した中で認識した。具体的にいえば、児童の発言を中心に授業を展開することや、児童に体験・実験の機会を与えて「考えさせる授業」を実践することなど、児童の積極的な参加を促し、児童が自ら学べるような授業づくりを実践することが、20人という少人数の教育条件を活かした実践であるように感じた。このような少人数の教育条件を最大限に活かした授業を実践できるよう、教員の力量が求められる。

この調査報告においては、2010年に実施した授業観察とインタビュー調査で得た情報に基づいて、カリフォルニア州の学級規模縮小クラスの実態について報告してきた。2010年の日本においては、来年度の予算をめぐって学級編制の標準を引き下げることが検討されている。日本においても学級編制の標準を引き下げた場合、単なる人数の縮小に留まらないよう、縮小したクラスを活かした授業づくりが求められるであろう。今後の研究においては、少人数学級の利点を生かした授業づくりの検討や、少人数学級の効果を発揮できるような仕組みづくりの検討が喫緊の課題となる。

星野 真澄 (筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻 後期2年  
／日本学術振興会特別研究員)

---

<sup>1</sup> 2010年7月には、中央教育審議会初等中等教育分科会が文部科学大臣に対して、学級編制の標準を引き下げることがを要求する提言書を提出した。その後同年8月には、文部科学省が公立義務教育諸学校教職員定数改善計画案を策定している。

文部科学省ウェブサイト、中央教育審議会初等中等教育分科会「今後の学級編制及び教職員定数の改善について(提言)」文部科学省、2010年7月26日

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/hensei/005/\\_icsFiles/afiedfile/2010/07/29/1296296\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/hensei/005/_icsFiles/afiedfile/2010/07/29/1296296_1.pdf)  
(2010年9月7日アクセス)

<sup>2</sup> 文部科学省ウェブサイト、「新・公立義務教育諸学校教職員定数改善計画(案)」文部科学省、2010年8月27日

[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2010/09/02/](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2010/09/02/)



---

1297156\_01.pdf (2011年1月20日アクセス)

<sup>3</sup> 財務省ウェブサイト、「平成23年度予算政府案、政府案閣議決定」財務省、2010年12月24日  
<http://www.mof.go.jp/seifuan23/yosan.htm> (2011年1月27日アクセス)

<sup>4</sup> 1996年に制定された学級規模縮小法は、カリフォルニア州教育法の第6.10章「学級規模縮小プログラム(第52120-52128.5条)」に登録された。

<sup>5</sup> カリフォルニア州教育法第52124条は、学級規模縮小の優先学年について規定している。

学級規模縮小の優先事項：1つの学年のみ学級規模を縮小させるのであれば、第1学年から取り掛かる。2つの学年で学級規模を縮小させる場合は、第1学年と第2学年を縮小する。3つあるいは4つの学年で実施する場合は、第1学年と第2学年、そしてもう一つは就学前教育か第3学年どちらでもよい。

<sup>6</sup> ジャッキーロビンソンアカデミー (Jackie Robinson Academy)

所在地：2750 Pine Avenue, Long Beach, CA 90806

ウェブサイト：

[http://www.lbusd.k12.ca.us/robinson/Jackie\\_Robinson\\_Academy/JRA\\_Homepage.html](http://www.lbusd.k12.ca.us/robinson/Jackie_Robinson_Academy/JRA_Homepage.html)

<sup>7</sup> バデューゴウッドランズ小学校 (Verdugo Woodlands Elementary School)

所在地：1751 N. Verdugo Rd., Glendale, CA 91208

ウェブサイト：<http://www.vwpta.com/>

<sup>8</sup> シャーマン小学校 (Sherman Elementary School)

所在地：1651 Union Street, San Francisco, California 94123

ウェブサイト：<http://www.shermanschool.org/>

<sup>9</sup> シャーマン小学校における授業見学は、校内を案内してもらいながら、各教室の授業を見学したものである。

<sup>10</sup> 授業観察は対象学年を優先して実施したため、観察した教科はその日の時間割に基づく。

<sup>11</sup> ジャッキーロビンソンアカデミーでは、第1学年の学級担任であるドール (Dole Bridget) 先生の授業を見学した後、ドール先生に対してインタビューを実施した。

<sup>12</sup> バデューゴウッドランズ小学校では、藤井 (Kayoko Fujii) 先生、ハウグ (Haug) 先生、チャング (Chiang) 先生の授業を見学後、同先生方に対してインタビューを実施した。

<sup>13</sup> シャーマン小学校では、シェンカン (Sara Shenkan-Rich) 校長先生の協力を得て校内の授業見学を行い、その後、第1学年の学級担任であるパーカー (Michelle Parker) 先生に対してインタビューを実施した。

## 付記

以上のような視察調査が実施できたのは、とりわけ3校の校長先生はじめ、学級担任並びに関係各位の多大なご理解とご協力をいただいたお陰である。この場を借りて多くの方々に深く感謝の念を表したい。

なお2010年11月30日～12月10日の渡米調査は、平成22年度日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受けて実施したものである。